

中央大学大学院 学生員 ○竹内 則雄

中央大学理工学部 正員 川原 睦人

## 1. 結言

有限要素法により双曲型偏微分方程式を解く方法として、次の2つの考え方があつた。すなわち、一つは連立方程式を解くことによって解を求める陰的な解法で、もう一つはそれを解かずに解を求める陽的な解法である。前者は精度や安定性の面ですぐれているといわれているが、双曲型の偏微分方程式の場合、計算時間などの面からみて、むしろ後者の陽的な解法の方が適しているといえよう。著者ら[1]は陽的な解法として、ラックス・ウェンドロフ法に基づく方法を提案した。この方法は、時間に依存する2階微分を含む項が生じ、これを潮流解析のような、非線型双曲型方程式に適用した場合、非常に複雑な方程式となり、この項の計算時間が多く必要とする。そこで、このような問題に対処するため、この方法を2段階に分けて解析する、2段階ラックス・ウェンドロフ法に基づく有限要素法を展開し、その収束性を検討したので、ここに報告する。

## 2. 基礎方程式

次の線型双曲型偏微分方程式を考える。

$$\frac{\partial u(x)}{\partial t} + \sum_{i=1}^p b_i(x) u_{,i}(x) = 0 \quad x \in \Omega \subset \mathbb{R}^p, \quad 0 < t \leq T, \quad 1 \leq p \leq 3 \quad (1)$$

ここに  $\Omega$  は、境界  $\partial\Omega$  を持つ有界領域とし、解  $u(x) \in C^0(\bar{\Omega} \times (0, T])$  は、

$$u(x, t) = 0 \quad x \in \partial\Omega \quad 0 < t \leq T \quad (2)$$

$$u(x, 0) = u^0(x) \quad x \in \Omega \quad (3)$$

を満足するものとする。 $C_0^\infty(\Omega)$  の  $\|\cdot\|_{H_0^1(\Omega)} \equiv \sum_{i=1}^p \|\frac{\partial}{\partial x_i}\|_{L^2(\Omega)}$  に対する完備化を  $H_0^1(\Omega)$  とするとき、次の弱解が定義される。

$$\left\langle \frac{\partial u}{\partial t}, v \right\rangle + \left\langle \sum_{i=1}^p b_i u_{,i}, v \right\rangle = 0 \quad v \in H_0^1(\Omega) \quad t \in (0, T] \quad (4)$$

$$u(x, t) \in H_0^1(\Omega), \quad \langle u(\cdot, 0), v \rangle = \langle u^0, v \rangle, \quad v \in H_0^1(\Omega) \quad (5)$$

ここに、 $\langle u, v \rangle = \int_{\Omega} (uv) d\Omega$  で、解については適当な仮定を仮定しておく。

補助定理 1.  $\Delta t$  を微小増分時間とするとき、次の関係が成り立つ。

$$\left\langle \frac{u^{n+1/2} - u^n}{(\frac{\Delta t}{2})}, v \right\rangle + \langle b_i u_{,i}^n, v \rangle = \left\langle \frac{\rho}{(\frac{\Delta t}{2})}, v \right\rangle \quad |\rho| < C_1 (\Delta t)^2 \quad (6)$$

$$\left\langle \frac{u^{n+1} - u^n}{\Delta t}, v \right\rangle + \langle b_i u_{,i}^{n+1/2}, v \rangle = \left\langle \frac{\varepsilon}{\Delta t}, v \right\rangle \quad |\varepsilon| < C_2 (\Delta t)^3 \quad (7)$$

ここに、 $u^n = u(n\Delta t)$  である。

## 3. 2段階ラックス・ウェンドロフ有限要素法

$\{\Phi_\alpha\}_{\alpha=1}^M$  で与えられる有限次元空間  $S_M \subset H_0^1(\Omega)$  の元を用いて、 $t = n\Delta t$  における関数を  $w^n$  と表わせば、

$$w^n(x) = \sum_{\alpha=1}^M \Phi_\alpha(x) C_\alpha^n \quad x \in \Omega \quad (8)$$

である。次の条件を満足する  $W^n(\chi) \in S_M$  を 2 段階ラックス・ウェンドロフ有限要素法解と呼ぶ。

$$\langle \tilde{W}^{n+1/2}, V \rangle = \langle W^n, V \rangle - \frac{\Delta t}{2} \left\langle \sum_{i=1}^p b_i W_{i,i}^n, V \right\rangle \quad (9)$$

$$\langle W^{n+1}, V \rangle = \langle W^n, V \rangle - \Delta t \left\langle \sum_{i=1}^p b_i \tilde{W}_{i,i}^{n+1/2}, V \right\rangle \quad (10)$$

$$\forall V \in S_M \subset H_0^1(\Omega)$$

$$\langle W^0, V \rangle = \langle U^0, V \rangle, \quad \forall V \in S_M \quad (11)$$

(8) 式 ~ (10) 式により, 次の解式が得られる。

$$\bar{A} \tilde{C}^{n+1/2} = A C^n - \frac{\Delta t}{2} B C^n \quad (12)$$

$$\bar{A} C^{n+1} = A C^n - \Delta t B \tilde{C}^{n+1/2} \quad (13)$$

$$\left( \begin{array}{l} A = \langle \Phi_\alpha, \Phi_\beta \rangle, \bar{A} = \langle \bar{\Phi}_\alpha, \bar{\Phi}_\beta \rangle \\ B = \langle \sum_{i=1}^p b_i \Phi_{\alpha,i}, \Phi_\beta \rangle \end{array} \right)$$

ここで, 左辺の係数行列  $\bar{A}$  は質量行列  $A$  の集中行列である。この結果, 第 7 回目の  $C^n$  が求まれば, 第  $n+1$  回目の  $C^{n+1}$  をただちに計算できる完全に陽的な解公式となっている。

#### 4. 2 段階ラックス・ウェンドロフ有限要素法の収束

$U$  の補間  $U_I$  を次の関係を満足する関数とする。

$$U_I = \sum_{\alpha=1}^M \Phi_\alpha(\chi) C_{I\alpha}, \quad U_I(\chi) = 0 \quad \forall \chi \in \partial\Omega \quad (14)$$

補助定理 2. 有限要素法の直径を  $h$  とすると次の関係が成り立つ。

$$\|U - U_I\|_{L_2(\Omega)} \leq K h^2 \|U\|_{H^2(\Omega)} \quad (15)$$

$$\|U - U_I\|_{H^1(\Omega)} \leq K h \|U\|_{H^2(\Omega)} \quad (16)$$

補助定理 3.  $\bar{Z}^n = \bar{W}_I^n - \bar{W}^n$ ,  $Z^n = W_I^n - W^n$ ,  $Z_I^n = U^n - W_I^n$  とすると次の関係が成り立つ。

$$\begin{aligned} \|\bar{Z}^{n+1/2}\|_{L_2(\Omega)}^2 - \|Z^n\|_{L_2(\Omega)}^2 &\leq C_1 \|\bar{W}_I^{n+1/2} - U^{n+1/2}\|_{L_2(\Omega)}^2 + C_2 \|\bar{Z}^{n+1/2}\|_{L_2(\Omega)}^2 + C_3 \|Z^n\|_{L_2(\Omega)}^2 \\ &\quad + C_4 \|Z^n\|_{L_2(\Omega)}^2 + \Delta t C_5 \|Z^n\|_{H_0^1(\Omega)}^2 + C_6 (\Delta t)^4 \end{aligned} \quad (17)$$

$$\begin{aligned} \|\bar{Z}^{n+1}\|_{L_2(\Omega)}^2 &\leq C_1 \|Z^n\|_{L_2(\Omega)}^2 + C_2 \|\bar{Z}^{n+1/2}\|_{L_2(\Omega)}^2 + C_3 \|\bar{W}_I^{n+1} - U^{n+1}\|_{L_2(\Omega)}^2 + C_4 \|\bar{Z}^{n+1}\|_{L_2(\Omega)}^2 \\ &\quad + C_5 \|Z_I^n\|_{L_2(\Omega)}^2 + \Delta t C_6 \|\bar{Z}^{n+1/2}\|_{H_0^1(\Omega)}^2 + C_7 \Delta t^4 \end{aligned} \quad (18)$$

定理  $\Delta t = \lambda h$  とすれば (12) 式 (13) 式による有限要素解は, (4) の弱解に収束する。

#### 5. 結言

双曲型の偏微分方程式を解く方法として, 差分法における 2 段階ラックス・ウェンドロフ法を基礎とする, 2 段階ラックス・ウェンドロフ有限要素法を提案した。この場合, 時間きざみ  $\Delta t$  を空間きざみ  $h$  のオーダーで分割すれば,  $h \rightarrow 0$  に対して, 正解に収束することを示すことができる。ここで提案した方法は, 潮流, 津波などの方程式に対する応用が可能である。

#### 参考文献

- 1) 川原陸人・竹内剛雄: 双曲型偏微分方程式に対する一有限要素法解析, 第 30 回年次学術講演会講演概要集, 1975.